

## カフカの『失踪者（アメリカ）』試論

その他のタイトル	Versuch über Kafkas Der Verschollene (Amerika)
著者	奥田 誠司
雑誌名	独逸文學
巻	61
ページ	145-156
発行年	2017-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/10868">http://hdl.handle.net/10112/10868</a>

## カフカの『失踪者（アメリカ）』試論

奥田 誠司

### 1

1912年9月下旬、イディッシュ演劇体験とフェリス・バウアー（Felice Bauer）との邂逅に基づいて誕生した『判決』（*Das Urteil*）は、カフカが作家としてのブレイク・スルーを体感した作品である。それから数日して、カフカは忘我の境地で『失踪者』（*Der Verschollene*）を書き進めていく。同年11月11日にはすでに5章が完成し、6章目もほとんど出来上がっている。しかも、その1週間後には『変身』（*Die Verwandlung*）の執筆に着手し、翌12月6日には書き終えている。昼間は役所仕事をしながら、夜になると昂揚感のなか、疾駆するような速さでペンを走らせ、次々と物語を生み出していった。この2か月半はカフカの生涯で、もっとも文学的収穫の多い時期といえる。

『失踪者』は未完のまま残されたが、1927年にマックス・ブロート（Max Brod）によって、『アメリカ』（*Amerika*）という表題で世に知られることになる。1968年のブロートの死によって、カフカの遺稿がいわば解禁となり、新しい「批判版カフカ全集」の刊行がはじまったのは1982年のことであった。批判版『失踪者』は1983年に出版された<sup>1</sup>。批判版全集は

---

1 Kafka, Franz. *Der Verschollene*. Schillemeit, Jost(Hrsg.) Frankfurt a. M. 1983.  
カフカのテキストからの引用は以下の略記号とページ数で本文中に示した。  
KV=*Der Verschollene*. Schillemeit, Jost(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1983.  
Br=*Briefe 1902-1924*. Brod, Max(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1983.  
E=*Sämtliche Erzählungen*. Raabe, Paul(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1987.  
F=*Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit*. Heller, Erich u.  
Born, Jürgen(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1986.  
H=*Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß*.

「本文」を収録した巻と、手稿に関する様々な情報をまとめた「資料」の2巻から成っている。「資料」篇は「伝承」、「成立」、「編集上の手入れ」、「異文」の4部に分けられている。「伝承」の部では、当該の巻の原稿についての文献学的描写（ノートの大きさや形、字体等の詳細な報告）の項目があり、「成立」はその巻に収められているテキストの成立時期の推定や創作方法、さらに長編小説の場合は章分けの根拠付けが示されている。「編集上の手入れ」は、文字どおり編集上、手を入れた箇所についての一覧であり、「異文」は作者による書き直しの過程の一覧である<sup>2</sup>。

プロートはいくら版を改めても、『アメリカ』という表題を変更しようとはしなかった。その理由として、カフカがこの本をよく「アメリカ的な長編小説」<sup>3</sup>と呼んでいたことを挙げている。だが、『失踪者』が本来のタイトルであることは、早い段階から指摘されていた。カフカは、「この長編小説はあなたのものです。というより、私のなかの善の観念を、[...] 明晰にあなたに伝えることができます。私の書いている小説は、無限に続きそうなのですが、さしあたって少し説明しますと、『失踪者』という題で、話をもっぱら北米合衆国で展開します。[...] 各章はⅠ火夫、Ⅱ伯父、Ⅲニューヨーク郊外の邸宅、Ⅳラムゼスへの道、Ⅴオクシデンタル・ホテルにて、Ⅵロビンソン事件です」（F86）とフェリスに報告している。プロートが第7章「隠れ家」、最終章「オクラホマの自然劇場」と命名したものは、カフカ自身は章題を付けていないので、批判版の目次ではそれぞれ、「たぶんかなり離れた [通りに] 違いなかった…」(Es mußte wohl eine entlegene...)、「カールはある街角で見た…」(Karl sah an einer Straßenecke...) と、その書き出しが掲げてある。

---

Brod, Max(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1983.

M = *Briefe an Milena*. Born, Jürgen u. Müller, Michael(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1986.

O = *Briefe an Ottilie und die Familie*. Binder, Hartmut u. Wagenbach, Klaus(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1981.

T = *Tagebücher 1910-1923*. Brod, Max(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1986.

2 明星聖子『新しいカフカ —「編集」が変えるテキスト』、慶應義塾大学出版会、2002年、70-71ページ参照。

3 Brod, Max; Nachwort zur ersten Ausgabe. In; Kafka, Franz; *Amerika. Roman*. Frankfurt a.M. 1986, S.260.

小説のテーマは以前からカフカの胸の内にあったらしく、1911年1月19日の日記には、「昔、ぼくはふたりの兄弟が互いに争って、そのうちのひとりとはアメリカへ渡り、もうひとりとはヨーロッパの牢獄に閉じ込められるという長編小説を書こうとしたことがあった」（T28）と書き込まれている。彼は『失踪者』の第1章「火夫」（Der Heizer）を、「全体としては内的な真実に由来するもの」（F322）と見なし、「ある断片」という副題を添えて発表した。そして『火夫』、『変身』、『判決』の3作品は「外的にも内的にも一体をなし、それらの間にはあからさまで、もっとひそやかな繋がりがある」（Br116）として、『息子たち』（Die Söhne）というタイトルで一冊の本に纏めることを出版社に提案している。

手稿ではカフカは、『火夫』と『変身』の主人公の名前を何度も間違えている。『火夫』では、主人公カールを『判決』のゲオルクとしたのが8箇所もある。『変身』では、グレーゴルをゲオルクと書いたのが3箇所、カールと混同したのが5箇所もある<sup>4</sup>。要するに、『判決』で生き残った「ロシアの友人」（ゲオルクの分身的存在であると同時に作者の文学的志向が仮託された形象）が姿を変えて、『火夫』や『変身』に登場したといえる。カールは「アメリカ」へ渡り、グレーゴルは「ヨーロッパの牢獄」に閉じ込められたのである。「ロシアの友人」のモデルになったといわれるのが、イディッシュ劇団の座長イツハク・レーヴィ（Jizchak Löwy）である。カフカは八折版ノートに『ユダヤ芝居のこと』（Vom jüdischen Theater）という表題で、レーヴィの生い立ちを小品化している<sup>5</sup>。それによると、彼は当時ロシア統治下のワルシャワに、敬虔なハシド派の両親の息子として生まれた。ハシド派信徒にとって芝居見物は「トレイフ [禁じられたもの]」であったが、演劇に魅了されていたレーヴィは14歳のとき、大劇場でマイアーベアーの『ユグノー教徒』を観た。その後、イディッシュ語の芝居に出会って感激し、役者になろうと決意するが、観劇が両親にばれて勘当されたのである。レーヴィは

4 Jahn, Wolfgang: „Kafkas Handschrift zum Verschollenen“. *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. Jg. 9. 1965, S.549.

5 Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Pasley, Malcolm (Hrsg.) New York/Frankfurt a.M. 1993, S.430ff.

孤独と貧しさに耐えながら、俳優としての道を歩んでおり、カフカが憧れながらも実現できない生き方を貫いていた。

レーヴィ率いる劇団との出会いは、孤独のなかに閉じこもりがちなカフカに仲間たちとの温かい同志的交流をもたらした。1911年10月22日の日記にはつぎのような記述がある。「非常にすぐれているのに稼ぎがなく、そのほかにも十分な感謝や評判を得ることもないこれらの俳優たちに対して私たちがいづく同情は、元来、多くの人びとの高貴な努力の、とりわけ私たちの努力の、悲しい運命についての同情にすぎない。そのために、この同情はまた比較にならないほど強いものなのだ。なぜなら、それは外面的には他の人びとに依拠してはいるが、実際には私たちに属しているからである。それにもかかわらず、それは何といても俳優たちと密接に結びついているので、今ではそれを彼らから解き放つことができなほどである。私はそのことを認識しているので、その同情は私の意志に逆らってますます彼らと結びつくのだ。」(T72) 演劇あるいは文学という「高貴な努力」に対して、公正な社会的評価や承認が得られない「悲しい運命」において、東ユダヤの俳優たちとカフカは一つに結ばれる。カフカは彼らのなかに、自分が連帯することができる仲間を見出したのである<sup>6</sup>。

## 2

『失踪者』は16歳の少年カール・ロスマンが、ニューヨーク港に到着する場面からはじまる<sup>7</sup>。女中に誘惑され、子どもができたので、両親によって故郷のプラハからアメリカへ追いやられたのである。汽船が速度を落として港に接岸する情景を、カフカはカール少年にこう観察させている。「ずっと眺めていた自由の女神像が、突然強くなった陽の光に

---

6 中澤英雄『カフカ ブーバー シオニズム』、オンブックス、2011年、75-91ページ参照。

7 批判版『失踪者』の冒頭では、カールは17歳となっているが、カフカ自身の校正を経て刊行された『火夫』は16歳となっていることから、本稿ではカールの年齢を16歳とする。ちなみにプロット版『アメリカ』も16歳である。

照らされているように見えた。女神の剣をにぎった腕はあらたに高く掲げられたような気がした。そして像のまわりには自由な風が吹いていた。」(KV 7) 女神が振りかざす「剣」<sup>8</sup>の先には、カールが「善のための闘い」(KV33) によって導かれる世界が示されているかのようである<sup>9</sup>。だが同時に、「あんなに高いや」(KV 7) とカールがつぶやいているように、遙か彼方にそびえたつ女神像は、新大陸で繰り返し「押しやられる」(Ebd.) 主人公の運命を暗示している。

アメリカは当時のヨーロッパ人にとって希望と自由の国であり、東欧からもユダヤ人を中心とする多くの移民が大西洋を渡った。ヨーロッパ人の目に映った新大陸は、文明の悪に染まっていない原住民インディアンが幸福な生活を送っている理想郷であった。カフカの母方の伯父は1905年に渡米し、1904年から1909年にかけて4人の父方の従兄弟がアメリカへ移住している<sup>10</sup>。カフカ自身は一度もアメリカへ行ったことがなかったが、フランクリンの自伝やディケンズ<sup>11</sup>、ホリチャーの旅行記、

8 フィンガーフートはカフカのテキスト群全体において「刀」や「屠殺包丁」は、「突進」や「狩り」とともに「書く」欲求を表す一連の形象スペクトルを構成していると論じている。Vgl. Fingerhut, Karl Heinz: „Bildlichkeit“ In: Binder, Hartmut (Hrsg.): *Kafka-Handbuch*, Bd. 2. Stuttgart, 1979, S.141ff.

9 この箇所は、短編集『田舎医者』(*Ein Landarzt*) のプロローグとして巻頭を飾っている『新人弁護士』(*Der neue Advokat*) の「大王の剣」を連想させる。「当時からして、インドの門は到達不可能だったが、その方向は『大王の剣』によって示されていた。」(E124) 主人公は、かつてアレクサンドロス大王の軍馬であったというブツェファロス。

10 Vgl. Northey, Anthony: *Kafkas Mischpoche*. Berlin, 1988, S.47-52.

11 1917年の日記には、「ディケンズの『コパーフィールド』(『火夫』は紛れもないディケンズの模倣だ。計画された長編小説はなおさらだ)。トランクの挿話、人を幸福にし、魅了する少年、賤しい仕事、田舎屋敷の恋人、汚らしい家々など。だが、とりわけ方法が。いま判ることだが、ほくの意図はディケンズ風の小説を書くことだったのだ」(T334) とある。カフカは、ディケンズのどこにそれほど惹かれたのかというヤノーホの問いに対し、「ものを統御していること、外部と内部の均衡のとれていること。世界と自我の間の相互関係が巧みに、しかも非常に簡明に描かれていること。じつに自然な調和があることなどです」と答えている。Janouch, Gustav: *Gespräche mit Kafka. Aufzeichnungen und Erinnerungen*. Frankfurt a.M, 1981, S.203f.

新聞や雑誌等を情報源として、彼は長編小説を書きはじめた。しかし、カフカはアメリカそれ自体を描こうとしたのではなかった。「長編小説はぼくであり、ぼくの物語はぼくなのです」(F226)とフェリスに語っているように、彼は新大陸のまっただなかに分身カールを飛び込ませて、放浪させるのである。

カールは船に傘を忘れたことを思い出して、船底へと降りていく。「無数の小部屋、絶えず曲がりくねった廊下や階段を通り抜け、書きもの机の置かれた空き部屋」(KV 8)を探しているうちに、彼は道に迷ってしまう<sup>12</sup>。途方にくれて、カールがある部屋のドアを狂ったようにノックすると、船室から火夫が現れる。その部屋には、「どこか天窓から、すでに船の上で使い古されたような、くすんだ光」(KV 8f.)が射し込んでいた。しばらくしてカールは、「ぼくはこの男に頼ろう、これ以上の友人がどこを探せば見つかるというのか」(KV10)という思いを抱く。

この火夫との出会いの場面は、短編集の表題にもなっている『田舎医者』の主人公が腹立ちまぎれに、もう数年来使われていない豚小屋の破れ戸を蹴とばすと、馬が全身から湯気をたてながら現れるシーンを想起させる。カフカ作品に頻出する馬は、作者の詩的インスピレーションの符丁である<sup>13</sup>。主人公の姓「ロスマン (Roßmann)」を分解すると、「Roß (馬) -mann (男)」である。E.M. ラジェックは、「ロスマンという名は隠喩的にカウボーイ、またはインディアンに似ている。これらの男性的形象はたいてい馬に乗った形で描かれるからである」<sup>14</sup>と分析している。のちにカールは逃走の際、「まるで馬のようだ」(KV286)と譬えられている。

小品『インディアンになりたい願い』(*Wunsch, Indianer zu werden*)では、馬は天へ翔け昇る躍動感のあらわれとして表現されている。「イ

12 『審判』のヨーゼフ・Kが出廷する裁判所の建物も、幾多の通路や階段で迷宮のごとき世界を創り上げている。裁判所世界とは、すべてが連鎖し合った膨大な有機体として描きだされており、Kは無限に非到達性の闘いを反復する運命にある。

13 Vgl. Fingerhut, Karl Heinz: *Die Funktion der Tierfiguren im Werke Franz Kafkas*. Bonn, 1969, S.134f.

14 Rajec, Elizabeth M.: *Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas*. Bern, 1977, S.109.

ンディアンだったらなあ、ためらいもなく走る馬に跨り、空中で斜めになり、揺れる大地の上で何度も震動し、やがて拍車を放した、だって拍車なんかなかったのだから、手綱を投げうった、だって手綱などなかったのだから、そして滑らかに刈り込まれた原野のほかには、目の前にはほとんど見える土地もなくなった、もはや馬の首もなく、馬の頭もなく。」(E18) カフカはアメリカを、「制約なき可能性に満ちた魔法の国」<sup>15</sup>と見なしており、とりわけインディアンは彼にとって自由の象徴であった。「幾夜も書くことで疾走すること、これこそ私が望んでいることです。そのために減じるか狂気に陥ることがあっても、それも望むところです」(F427) とフェリスに告げているように、「卑しい下層で […] 肉体と魂を完全に開放」(T184) し、疾駆するような勢いで書くことが彼の理想とする創作方法であった。カフカはまた、書くという行為そのものにおいても禁欲的な態度で臨み、自己を書く身体そのものへと鍛え上げていくのである。彼は飲酒を忌避し、肉食主義を遵守することで精神的・身体的な純粋さを保つことを、あたかも戒律のように守っていた。妹のオットラに宛てた手紙のなかで、カフカは自らの肉食主義に「何か孤立したもの、狂気に近いもの」(O80) が内在していることを認めている。

### 3

火夫の処遇をめぐる不満に同情したカールは、船長のもとに赴く。ここで思いがけず、カールを迎えにきていた伯父のヤーコブと出会う。上院議員で実業家のヤーコブは、「ことによると正義が問題となるかもしれないが、規律も大切である」(KV48) と述べる。その後、カールはニューヨークの伯父の豪邸（商用を兼ねた7階建ての高層ビルで、6階まではオフィスとして使用されている）に引きとられる。最上階にあるカールの部屋にはアメリカ製の複雑な仕掛けをもった机が置かれており、ピアノも購入してもらった。伯父は「何事もよく試し、観察すべきであるが、それらにとらわれてはならない。ヨーロッパ人がアメリカに来た頃は、いってみれば誕生と同じようなものだ」(KV56) とカールに忠告する。

---

15 Janouch(1981), S.162.



ヤーコブはカールの英語が上達するにつれて、自分の知り合いに合わせようとする。最初に紹介される人物は、「すらっとした、若い、信じられないほど身のこなしのしなやかな」(KV62) マックという青年である。カールは余暇を利用して、彼と一緒に乗馬の教習所に通いはじめた。マックが教習所に現れると、それまでうつらうつらしていた馬たちが棒立ちになり、鞭を鳴らす音が高く響きわたる。そして、彼の巧みな乗馬ぶりを見ようと見物人、馬丁、騎馬学校の生徒までもが集まってくる。騎乗という「まるで夢のように過ぎる愉しみ」(KV65)のあとで、カールの騎乗にことのほか満足したときには、マックは彼の頬を何度もたたいて、忽然と姿を消してしまう。

ある日、伯父の友人ポランダー氏がカールをニューヨーク郊外の邸宅へ招待し、娘のクララに会わせたいと申し出るが、ヤーコブは懸念の表情を浮かべる。しかし、カールは伯父の意向に背いて、ポランダー氏の申し出を受け入れる。邸宅で様々な災難に遭遇したカールは、伯父からの短い手紙を受け取る。その手紙には、不服従を示す重大な行為が判明したので、カールを永久に追放するという内容が書かれていた。ポランダー氏が強引にカールを自分の邸宅へ招いた背後には、娘クララの婚約者マックが関与していた。カールを「おびき寄せた」(KV120) マック (Mak) とは、カフカの友人マックス (Max) の姿が投影されている。カールは、火夫との別れでは、伯父に身体をしっかり抱きかかえられてタラップを「一段一段降りた」(KV52) が、いまや彼の目の前には手すりのない階段が下へ通じており、皓々と輝く月の光のなか、「自分が歩みたい方向」(KV120) へと旅立つのである。

伯父から追放されたカールは、休息するために飛び込んだ安宿で失業中の浮浪者ドラマルシュとロビンソンに出会う。彼らは親しげにカールのきれいな服を脱がせ、換金してしまう。食料調達から戻ったカールは、自分のトランクが勝手に開けられたことで口論となり、彼らと決別する。それからホテルの調理主任の助けで、彼はエレベーターボーイとして雇われることになる。だが、その制服は「ずいぶん窮屈にできており、そもそも息ができるかどうか確かめるため、何度も深呼吸」(KV185) しなければならなかった。M. アンダーソンによれば、「衣服」はカフカの書く行為と隠喩的な関係を取り結んでおり、内的な事実を包み隠す表層

ないし外面をあらわす負の性格を帯びた形象として、身体的自由や自然な表情、さらにはそのアイデンティティを損なうもののメタファーになっている<sup>16</sup>。

カールはホテルで懸命に働きながら、余暇の時間には調理主任の秘書でタイピストのテレゼから借りた商業通信文の課題に没頭するが、正解を巡って2人の意見は噛み合わない。彼は同僚のレネルから、ホテルの前でドラマルシュという男に話しかけられ、カールのことを尋ねられたと聞かされる。テレゼはカールにドラマルシュと関わらないように懇願する<sup>17</sup>。ところが、深夜勤務中のカールのもとに、もうひとりの旅仲間であったロビンソンが泥酔して現れる。彼はロビンソンの介抱で一時職場を離れたことでボーイ長に呼びつけられ、即刻解雇される。このボーイ長の怒りを巧みに煽りたてるのが、門衛主任のフェオドールである。門衛主任の容姿は、「大男で、たくさん飾りのついた豪華な制服が――両方の肩にも、それから両腕のあたりにも金色の鎖やらモールがぐねるように巻きつけられていて――彼を実際よりもさらに肩幅の広いものにしていて。ハンガリー人によくみられるような、幅が広く、先が尖るようにピンとひっぱられた、黒光りのする口髭は頭をどんなに速く動かしても微動だにしなかった」（KV221）と描写されており、作者の父ヘルマンを彷彿とさせる。

カフカはイディッシュ劇団との交流の頃から、父への嫌悪感をはっきりと意識するようになる。ヘルマンは俳優レーヴィのことを害虫に譬え、「犬と一緒に寝るやつは、蚤と一緒に起きる」（H125）と蔑んだ。また、

16 マーク・アンダーソン（三谷・武林訳）『カフカの衣装』、高科書店、1997年、97ページ参照。

17 ポンメルン出身のテレゼ・ベルヒトールト（Therese Berchtold）には、カフカを結婚へと誘おうとしたフェリス・バウアー（Felice Bauer）の姿が投影されている。1887年、オーバーシュレージエンで生まれたフェリスは12歳のとき、一家でベルリンに移る。1908年、レコード会社の速記タイピストとして働く。1909年、当時最先端の口述録音機製作会社に転職し、数年のうちに業務代理人に昇進。カフカとの2度目の婚約解消後、1919年にベルリンの裕福な実業家と結婚し、一男一女をもうける。1936年、家族とともにアメリカ合衆国へ移住。1955年、カフカの手紙をニューヨークのショッケン出版社に渡す。1960年死去。

マックスについては、「血迷ったリトホ [イディッシュ語で狂気じみた痲癩持ち]」(T84)と罵倒している。1919年11月、カフカ36歳の折に書かれた『父への手紙』(*Brief an den Vater*)は、家庭内での躰、大学進学や就職、結婚の試みなどに対する父親の暴君的な態度が、「弁護士流の策略」(M85)をもって綿密に綴られている。体格でも、「力強く大柄で胸幅がある」(H123)ヘルマンは、「痩せて弱々しく華奢」(Ebd.)なカフカを圧倒し、劣等意識を肥大させた。こうした威圧的な父親をまえにして、息子は自信を喪失し、「無限の罪意識」(H143)に苛まれたのである。手紙のなかで、「ぼくは書くことによって、ささやかな自立と逃避の試みを重ねてきました」(H159)と告白しているように、「書くこと」は父親の勢力圏から脱した、いわば自由の息づく世界であった。『失踪者』執筆時、カフカは旅先からプロートに、「自立というものはなかなかいいものだ。アメリカの予感がこの貧しい肉体に吹き込まれている」(Br95)と書き送っている。

## 4

カールは庇護と追放を経験しながら、新大陸を彷徨するのであるが、ある街角でオクラハマ劇場が、クレイトン競馬場で劇団員の募集をおこなうという旨のポスターを見かける<sup>18</sup>。「誰でも歓迎！芸術家になりたいものは来たれ！わが劇場は誰でも適材適所に採用！」(KV387)とは書いてあったが、給料の記載が抜けていることにカールは不信感をもつ。しかし、「誰でも歓迎！」(Ebd.)という文句が、それまで居場所を見出せなかった彼の心を強く捉える。カールが会場に着くと、天使の姿をした大勢の女性たちが応募者たちを出迎える。そのなかにファニーという女性がいるが、彼女に関しては「古い女友だち」(KV393)であるこ

18 プロートは、この断章に「オクラホマの自然劇場」(Naturtheater von Oklahoma)という章題を付けて、最終章に据えた。カフカの手稿では「自然」(Natur)という言葉は登場せず、終始「オクラハマ劇場」(T[h]eater von Oklahoma)となっているので、それにならう。なお、この断章は1年半あまりの中断のあと、1914年10月、『審判』執筆のためにとった休暇中に書かれている。

としか分からない。ファニーによれば、この劇場は「ほとんど際限のない」（KV394）規模を誇るという。誰もが自分の本性に合った役を与えられるという劇場は、孤独なカフカに仲間たちとの同志的交流をもたらし、共同体を予感させたあのイディッシュ劇団が寓意されているのかもしれない。カールは劇団員に採用されるが、すべては本部があるオクラハマにおいて再吟味される。ちなみに「オクラホマ」とは、「赤い人々」という意味のチョクトー族インディアンの名に由来し、歴史的には全米で迫害されたインディアンが、「涙の道」を経てたどりついた場所である<sup>19</sup>。

『アメリカ』のあとがきで、プロートはカフカが話したという結末についてこう伝えている。「カフカはこの小説がこれまで彼が書いてきた他のどの作品よりも、希望に満ちた『明るい』ものだということを自分でも意識していたし、よく対話のなかで強調していた。— これと関連して […] 自由と遠い異国への憧れとが、いつも彼のなかに生きていたことを、さらに付けくわえることができるかもしれない。 […] 私は彼と何度となくかわされた会話から、『オクラホマ自然劇場』という、ここにある未完の一章、その導入の部分をカフカがこよなく愛し、感動的な美しさで朗読したこの章が最終章で、和解的な響きのなかで終わる予定であったことを知っている。カフカは微笑みながら謎めいた言葉で、この若い主人公が『ほとんど際限のない』劇場において、仕事、自由、支援を、そればかりか故郷や両親まで、まるで天国的な魔法によるかのように、再び見出すことになるだろうとほのめかした。」<sup>20</sup> ただし、プロートは同時に、「もっともカフカはこの小説の主人公カール・ロスマンの最後を、悲劇的なものにしようとの計画をたびたび抱いていた」<sup>21</sup>とも述べており、彼の見解は曖昧なものといわざるを得ない。カフカ自身は1915年の日記で、『失踪者』と『審判』（*Der Proceß*）の主人公を対比して、「ロスマンと K、罪なき者と罪ある者、結局、どちらも等しく

19 中島文雄編『英米制度・習慣事典』、秀文インターナショナル、1998年、142および219ページ参照。

20 Brod(1986), S.260.

21 Brot, Max; *Franz Kafka. Eine Biographie*. Prag, 1937, S.169.

罰を受けて殺される。罪なきものは打ち碎かれるというよりは、むしろ軽く脇へ押しやられる」(T299)と言及している<sup>22</sup>。

断章(2)「カールはある街角で見た…」(プロート版では「オクラホマの自然劇場」)は、求職者の群れが広大なアメリカ大陸を汽車に乗ってオクラハマへ旅立つところで終わっている。ヤノーホとの対話のなかでカフカは、『『火夫』は夢、もしかしたら決して現実ではなかった何かについての思い出です』<sup>23</sup>と回想しており、そこに漂う一種奇妙な明るさに関しては、「物語そのものにあるのではなく、物語の対象、つまり青春のなかにある」<sup>24</sup>と語っている。この「ほとんど際限のない」劇場とは、おそらくカールにはたどりつくことのできない「規律」と「正義」が調和されたユートピア的な世界として描かれているのであろう<sup>25</sup>。手稿では断章(2)のあとに、「二日〔二晩〕の旅だった…」(Sie fuhren zwei Tage...)ではじまる1ページほどの断片(プロート版では「オクラホマの自然劇場」の末尾に添えられている)が続いている。列車は「暗くて狭い、引き裂かれたような峡谷」(KV419)にさしかかり、起伏の多い川床は激しい水飛沫をあげ、その溪流は列車が渡る橋の下へと打ち寄せる。そして、列車が水面近くをかすめたとたん、冷気がカールの顔を撫でる。創作ノートはここで途切れ、ロスマンは文字通り失踪することになる。

---

22 『審判』は、フェリスとの婚約にまつわる体験が色濃く反映されている。カフカは彼女との婚約を、「まるで犯罪人のような束縛」(T240)と感じ、それをヨーゼフ・Kの「逮捕」として表現した。つまり、フェリスとの結婚は書くために必要な孤独を奪い、日常性への埋没を意味するからである。Kは31歳の誕生日の前夜に、犬のように処刑される。『審判』を書きはじめた1か月前の1914年7月3日はカフカの31歳の誕生日で、彼はその前夜に婚約解消を決意している。

23 Janouch(1981), S.44.

24 Ebd.

25 Vgl. Sokel, Walter H.: *Franz Kafka – Tragik und Ironie. Zur Struktur seiner Kunst.* München/Wien, 1967, S.329.